

教育研究業績書

2017年05月29日

所属：看護学科

資格：准教授

氏名：布谷 麻耶

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	臨床看護学, 慢性病看護学
学位	最終学歴
博士（看護学）	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 保健婦免許	2001年4月1日	
2. 看護婦免許	2001年4月1日	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 日本看護科学学会学術論文奨励賞受賞	2013年12月1日	「クローン病患者への食事指導プログラムの開発と有効性の検証」論文に対して
2. 日本看護研究学会奨励賞受賞	2012年7月1日	「クローン病者の食生活体験のプロセス」論文に対して

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 基礎と臨床がつながる疾患別看護過程	共	2015年9月	学研メディカル秀潤社	潰瘍性大腸炎の原因や症状、治療、一般的な経過について解説した上で、肛門部に皮膚障害のある患者を事例として、情報収集からアセスメント、看護問題の抽出と絞り込み、看護計画の立案、評価までの一連の看護過程の展開について解説した。
2 学位論文				
1. クローン病者の食生活体験に関する研究	単	2008年3月	大阪大学大学院医学系研究科	クローン病者の食生活体験に焦点を当て、病者が発病後、処方された食事療法にどのように対応しているのか、食事を通じた他者との関わりの中で、どのような問題を抱え、それにどう対応してきたのかを明らかにすることを目的にGrounded Theory Approachを用いて寛解期にあり在宅で生活している成人クローン病患者17名に半構造化面接を行い、データを分析、論文としてまとめた。結果、病者が食事制限と食欲との狭間で、標準的な食事療法から試行錯誤しながら自分に合った食生活スタイルを見出すプロセスが明らかになった。
2. 在宅静脈栄養法施行患者のQuality of Lifeに関連する要因の分析	単	2003年3月	大阪大学大学院医学系研究科	在宅静脈栄養法 (HPN) 施行患者のQOLには身体・心理・社会的要因が影響を及ぼすものと考え、QOLにプラスまたはマイナスに働くと考えられる変数を選択し因果モデルを考案した。この因果モデルをデータに基づいて検証することを目的に、HPN施行患者27名に質問紙調査を実施した。結果、自覚症状が多くなると不安感が増強し、それがQOLを低下させる方向に影響した。また、活動レベルが良好なことは、自尊心を高め、高い自尊心は仕事への復帰を促し、それがQOLを高める方向に影響した。
3 学術論文				
1. クローン病患者の運動の捉え方と影響要因の検討（査読付）	共	2017年3月	日本難病看護学会誌, 第21巻第3号, P. 181-193	クローン病患者にとって運動がどのような効果があるのか、患者と運動との間にどのような影響因子があるのかを明らかにするために、アンケートの自由

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
2. 進行期卵巣がんの妻と療養を共にした壮年期配偶者の体験－2人の遺族の分析－（査読付）	共	2016年3月	天理医療大学紀要, 3(1), 16-24.	記載欄に回答のあった103名の記述をコード化し内容分析を行った。結果、運動の効果としては体力の向上と体調維持があり、運動の影響因子としては発病前の運動習慣や運動強度などがあった。 本人担当部分：計画立案を担当。 共同発表者：藤本悠、水野光、瀬戸奈津子、布谷麻耶、市川奈央子、清水安子
3. 炎症性腸疾患患者の生物学的治療選択に関する意思決定プロセス（査読付）	共	2016年12月	日本看護科学会誌, 36巻, P.121-129	進行期卵巣がん患者の療養過程における壮年期配偶者の体験を明らかにすることを目的に、2名の遺族を対象に半構造化面接を行い、データを質的に分析した。結果、卵巣がんの診断から死まで妻が生きることを支え続ける配偶者の体験が明らかになるとともに、配偶者への長期的な支援の必要性が示唆された。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：松井利江、福田陽子、布谷麻耶
4. 炎症性腸疾患患者を対象としたセルフマネジメント介入の研究動向（査読付）	単	2014年12月	日本難病看護学会誌, 第19巻第2号, P.201-211	炎症性腸疾患患者のセルフマネジメントに焦点を当てた介入研究の研究動向、介入効果や今後の課題について明らかにすることを目的として、32件の英語文献を分析した。結果、ここ10数年で本テーマに関する研究が増加していた。疾患に関する知識の習得や向上はいずれの介入でも効果がみられたが、知識の習得が患者のQOLや身体・心理的健康状態の改善には繋がっておらず、患者教育のあり方を見直す必要性が示唆された。
5. 静脈血採血技術を修得するための新人看護職員を対象とした集合研修の評価（査読付）	共	2013年1月	天理医療大学紀要, 第1巻第1号, P.11-21	炎症性腸疾患患者のセルフマネジメントに焦点を当てた介入研究の研究動向、介入効果や今後の課題について明らかにすることを目的として、32件の英語文献を分析した。結果、ここ10数年で本テーマに関する研究が増加していた。疾患に関する知識の習得や向上はいずれの介入でも効果がみられたが、知識の習得が患者のQOLや身体・心理的健康状態の改善には繋がっておらず、患者教育のあり方を見直す必要性が示唆された。 新人看護職員と実地指導者が各々の課題を明確にすることを目標に、新人看護職員研修の一環として企画した静脈血採血技術の集合研修を両者の視点から評価することを目的に、自由記載による振り返り用紙の記述内容を質的に分析した。結果、新人看護職員は手技の未熟さ、患者への配慮不足といった実践上の課題を見出しており、実地指導者は不十分な個別指導、指導することに対する気負いや緊張といった指導上の課題を見出していた。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共著者名：布谷麻耶、石田寿子、有田秀子、川口ちづる、岡田三枝、高田幸恵、森継知恵美、有田清子
6. 地域高齢者における保健行動に関連した自己制御尺度の開発（査読付）	共	2012年9月	日本看護科学会誌, 第32巻第3号, P.85-95	地域高齢者の保健行動に関連する自己制御力を評価する尺度を開発することを目的に、地域高齢者1,883名を対象に質問紙調査を郵送法で実施した。さらに、地域高齢者38名に対し、歯磨き行動を維持するプログラムに1ヵ月間参加することを求め、介入前とその1.5ヵ月後に尺度を用いて調査した。結果、自己制御尺度の妥当性と信頼性が確認された。 本人担当部分：データ収集を担当。 共著者名：深田順子、鎌倉やよい、坂上貴之、百瀬由美子、布谷麻耶、藤野あゆみ、横矢ゆかり
7. クロウン病患者への食事指導プログラムの開発と有効性の検証（査読付）	共	2012年9月	日本看護科学会誌, 第32巻第3号, P.74-84	クロウン病患者の寛解維持と食事満足度の向上を目的に食事指導プログラムを開発し、ランダム化比較デザインのもとその有効性を検証した。結果、プログラムを適用した介入群において、試し体験行動が有意に増加した。疾患の増悪はなく、食事満足度に有意な変化はなかった。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共著者名：布谷麻耶、鎌倉やよい、深田順子、熊澤友紀
8. クロウン病者がウェブ上で闘病記を綴ることの意味（査読付）	単	2012年12月	日本難病看護学会誌, 第17巻第2号, P.151-162	クロウン病者がウェブ上で綴り、公開している闘病記の実態を明らかにし、病者にとって闘病記が持つ意味について考察することを目的に、162件のブログによる闘病記について分析した。結果、ウェブ上で綴る闘病記には、読者とのコミュニケーションツール、同病者との交流の場、健康状態のモニタリングツールとしての意味が見出され、臨床の場を越えた看護支援の可能性が示唆された。
9. PRECEDE-PROCEEDモデルを用いた地域高齢者における口腔保健行動	共	2011年9月	日本摂食・嚥下リハビリテーション学会雑誌,	高齢者が自律的に実行できる口腔ケアプログラムの開発を目指し、PRECEDE-PROCEEDモデルを用いた口腔

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
<p>に関連する評価尺度の開発（査読付）</p> <p>10. 周術期患者に対する寝衣交換技術の向上を目指した教育実践（査読付）</p>	共	2011年12月	<p>第15巻第2号, P. 199-208</p> <p>愛知県立大学看護学部紀要, 第17巻第1号, P. 25-32</p>	<p>保健行動に関連する評価尺度を開発することを目的に、地域高齢者および同居家族を対象に質問紙調査を郵送法で実施した。分析対象は803名で、因子分析等の結果、口腔保健行動に関連する尺度41項目のうち25項目が選定された。PRECEDEモデルとの適合度は、GFI0.866、AGFI0.837を示し、内的整合性を示すα係数は尺度全体で0.773であり、評価尺度の妥当性と信頼性は許容範囲であることが確認された。</p> <p>本人担当部分：計画立案、データ収集を担当。</p> <p>共著者名：深田順子、鎌倉やよい、百瀬由美子、吹田（布谷）麻耶、藤野あゆみ、横矢ゆかり、坂上貴之</p>
<p>11. 地域高齢者の口腔保健行動—PRECEDE-PROCEEDモデルを用いた類型化—（査読付）</p>	共	2010年3月	<p>身体教育医学研究, 第11巻第1号, P. 27-35</p>	<p>術後疼痛があり輸液・カテーテル類が挿入されている患者の寝衣交換ができることを目指して、従来の教育方法に加えて寝衣交換に対する学生による自己評価及び教員等による他者評価を形式的に実施し、その効果を学修達成度から明らかにした。結果、学修達成度が「非常に・大体当てはまる」と自己評価した割合が75%以上の項目は、学内演習では9項目、術後患者に初めて寝衣交換を実施した際には0項目、実習終了時では19項目となり、この教育方法の有効性が示唆された。</p> <p>本人担当部分：計画立案、データ収集、分析までを担当。</p> <p>共著者名：深田順子、熊澤友紀、鎌倉やよい、布谷麻耶、榎原由美子、鶴田淳一、山田佳代子、兵藤千草</p>
<p>12. 看護基礎教育における周術期の臨床判断力の向上を目指した教育実践（査読付）</p>	共	2010年12月	<p>愛知県立大学看護学部紀要, 第16巻第1号, P. 31-39</p>	<p>高齢者が主体的・自律的に取り組むことができる口腔ケアプログラムの開発を目指し、その第一段階としてヘルスプロモーションの観点から高齢者自身が行っている口腔保健行動の現状を質的に明らかにすることを目的にシニアクラブに所属する高齢者を対象にフォーカス・グループ・インタビューを行った。得られたデータをPRECEDEモデルを基に分類と抽象化を行い、介入の視点を検討した。</p> <p>本人担当部分：計画立案、データ収集、分析、論文執筆までを担当。</p> <p>共著者：吹田（布谷）麻耶、百瀬由美子、深田順子、森本紗磨美、横矢ゆかり、藤野あゆみ、坂上貴之、鎌倉やよい</p>
<p>13. クロウン病者の食生活体験のプロセス（査読付）</p>	共	2009年12月	<p>日本看護研究学会雑誌, 第32巻第5号, P. 19-28</p>	<p>周術期患者に対するフィジカル・アセスメントに基づいた判断力の向上を目指して、実習におけるフィジカル・アセスメント技術に対し学生による自己評価と教員等による他者評価を実施し、その効果を学修達成度から明らかにした。結果、学修達成度が「非常に・大体当てはまる」の割合が自己・他者評価とも75%以上の項目は、実習初日の学内演習では8項目、臨地実習では9項目、実習終了時では24項目となり、この教育方法の有効性が示唆された。</p> <p>本人担当部分：計画立案、データ収集、分析までを担当。</p> <p>共著者名：深田順子、熊澤友紀、吹田（布谷）麻耶、鎌倉やよい、竹内麻純、鈴木さおり、兵藤千草</p>
<p>14. クロウン病者の食事を通じた他者との関わりの体験（査読付）</p>	共	2007年12月	<p>日本難病看護学会誌, 第12巻第2号, P. 147-155</p>	<p>クロウン病者の食事を通じた他者との関わりの体験を明らかにすることを目的にGrounded Theory Approachを用いて、成人クロウン病者17名に半構造化面接を行い、データを分析した。結果、病者の食事を通じた他者との関わりの体験は、病者が発病後、他者との食事の場で身近な者と美味しさを分かち合えない、食事を共にする相手に気を遣われるなどの心的負担感を感じながらも、試行錯誤しながら自分なりの対処法を見出し、確立していくプロセスが明らかになった。</p> <p>本人担当部分：研究の全過程を担当。</p> <p>共著者：吹田（布谷）麻耶、鈴木純恵</p>
<p>15. クロウン病者のQOL研究の現況—1996～2005年—（査読付）</p>	共	2007年12月	<p>日本看護研究学会雑誌, 第30巻第5号, P. 77-82</p>	<p>クロウン病者への看護の質向上に向け、今後必要とされる研究について検討することを目的に、クロー</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
16. 在宅静脈栄養法施行患者のQuality of Lifeに関連する要因の分析(査読付)	共	2004年4月	日本看護研究学会雑誌, 第27巻第1号, P. 107-113	<p>ン病者のQOLに関する過去10年間の国内外の文献141件を対象とし、研究方法と内容について分析した。結果、このテーマに関する研究は増加傾向にあり、量的研究が9割以上を占め、データ収集法は既存の尺度を用いた質問紙法が6割を占めていた。さらに、研究内容はQOLの尺度開発に関する研究、QOLの影響要因に関する研究など7種類に分類された。</p> <p>本人担当部分：文献収集から分析、論文執筆まですべて担当。</p> <p>共著者：吹田(布谷)麻耶、鈴木純恵</p> <p>在宅静脈栄養法(HPN)施行患者のQOLには身体・心理・社会的要因が影響を及ぼすものと考え、QOLにプラスまたはマイナスに働くと考えられる変数を選択し因果モデルを考案した。この因果モデルをデータに基づいて検証することを目的に、HPN施行患者27名に質問紙調査を実施した。結果、自覚症状が多くなると不安感が増強し、それがQOLを低下させる方向に影響した。また、活動レベルが良好なことは、自尊心を高め、高い自尊心は仕事への復帰を促し、それがQOLを高める方向に影響した。</p> <p>本人担当部分：研究の全過程を担当。</p> <p>共著者：吹田(布谷)麻耶、高木洋治</p>
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 慢性創傷患者における疼痛の質的評価 -日本語版Short-Form McGill PainQuestionnaire-2 を用いて -	共	2017年3月24日	第15回日本フットケア学会年次学術集会(於岡山)	慢性創傷患者を対象に、日本語版Short-Form McGill Pain Questionnaire-2 (SF-MPQ-2) を用いて、平常時の状態での疼痛の質的評価を行った。結果、対象者は、平常時より持続的な痛みの性質が強い複雑な疼痛を抱えていた。また、痛みの強い対象者では、侵害受容性慢性疼痛、神経障害性疼痛に関連した痛覚過敏やアロディニアの徴候が認められた。
2. 化学療法を受ける壮年期婦人科がん患者の配偶者へのケアモデル案の作成と評価	共	2016年8月28日	日本家族看護学会学術集会(於山形)	化学療法を受ける壮年期婦人科がん患者の配偶者に対するケアモデル案を作成し、その評価を行うことを目的に、まず国内外の文献検討を行い、33件を選択した。これらの論文結果および著者らの先行研究結果から、配偶者のケアに関する内容を抽出し、意味内容に応じてカテゴリ化し、ケアモデルの構成要素としてケアモデル案を作成した。次に、がん診療拠点病院の婦人科病棟に勤務する看護師を対象にグループインタビューを行い、ケアモデル案の妥当性と実用性を評価した。結果、ケアモデル案の内容の妥当性は認められたものの、配偶者に関わる機会の少なさが障壁となり、配偶者へ直接介入するケア項目の実践は困難なことが明らかとなった。
3. クロウン病患者の疾患と運動の関連についての検討；自由記載の質的研究	共	2016年8月27日	第21回日本難病看護学会学術集会(於北海道医療大学当別キャンパス)	慢性創傷患者を対象に、日本語版Short-Form McGill Pain Questionnaire-2 (SF-MPQ-2) を用いて、平常時の状態での疼痛の質的評価を行った。結果、対象者は、平常時より持続的な痛みの性質が強い複雑な疼痛を抱えていた。また、痛みの強い対象者では、侵害受容性慢性疼痛、神経障害性疼痛に関連した痛覚過敏やアロディニアの徴候が認められた。
4. 潰瘍性大腸炎患者の補完代替医療選択に関する意思決定	単	2016年8月27日	第21回日本難病看護学会学術集会(於北海道医療大学当別キャンパス)	化学療法を受ける壮年期婦人科がん患者の配偶者に対するケアモデル案を作成し、その評価を行うことを目的に、まず国内外の文献検討を行い、33件を選択した。これらの論文結果および著者らの先行研究結果から、配偶者のケアに関する内容を抽出し、意味内容に応じてカテゴリ化し、ケアモデルの構成要素としてケアモデル案を作成した。次に、がん診療拠点病院の婦人科病棟に勤務する看護師を対象にグループインタビューを行い、ケアモデル案の妥当性と実用性を評価した。結果、ケアモデル案の内容の妥当性は認められたものの、配偶者に関わる機会の少なさが障壁となり、配偶者へ直接介入するケア項目の実践は困難なことが明らかとなった。
5. クロウン病患者の運動習慣についての実態調査	共	2016年7月10日	第7回日本炎症性腸疾患学会学術集会(於国立京都国際会館)	潰瘍性大腸炎患者の補完代替医療を用いるか否かの意思決定プロセスを明らかにすることを目的に、Grounded Theory Approachを用いて、寛解期にある患者14名に半構造化面接を行い、継続比較分析を行った。結果、患者が補完代替医療を用いるか否かの意思決定プロセスは、「体調の良し悪し」の判断を起点とし、「セルフコントロール欲求と不信とのバランス」をいかにとるかに依っており、このバランスには「他者からの影響」と「補完代替医療の実行可能性」が影響していた。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
6. 卵巣がんの妻と死別した高齢配偶者のSpiritual Needs	共	2015年9月6日	日本家族看護学会第22回学術集会（於国際医療福祉大学小田原保健医療学部）	、発熱の3項目において運動群が非運動群より有意に症状が少なかった。 本人担当部分：計画立案を担当。 共同発表者：水野光、瀬戸奈津子、布谷麻耶、藤本悠、市川奈央子、清水安子、阪上佳誉子、伊藤裕章 卵巣がんの妻と死別した高齢配偶者が抱くSpiritual Needs を配偶者の語りから抽出することを目的に、配偶者2名に半構造化面接を行い、得られたデータを質的に分析した。結果、「家族の健康を守りたい」「常に一緒にいたい」等の高齢配偶者が抱く5つのSpiritual Needs が抽出された。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：福田陽子、松井利江、布谷麻耶
7. 化学療法を受ける壮年期婦人科がん患者の配偶者が体験する困難と対処	共	2015年9月6日	日本家族看護学会第22回学術集会（於国際医療福祉大学小田原保健医療学部）	化学療法を受ける壮年期婦人科がん患者の配偶者が体験している困難と対処を明らかにすることを目的に、配偶者10名に半構造化面接を行い、得られたデータを質的に分析した。結果、配偶者が抱える7つの困難と9つの対処法が明らかになり、時間経過とともに現れる困難と対処法は異なっていた。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：松井利江、福田陽子、布谷麻耶、片岡純
8. クロウン病者への行動分析的アプローチに基づく食事指導プログラムの効果	単	2015年7月25日	第20回日本難病看護学会学術集会（於東京都大田区産業プラザP10）	クロウン病者が症状の寛解を維持し、かつ食事満足度が向上することを目的に開発した食事指導プログラムに、病者の試し体験行動の形成から維持に至るまでの行動変容を導くため、行動分析的アプローチを基に修正を加え、その効果を検証した。結果、修正プログラムは、病者が病状を維持したまま試し体験行動を増加、継続するのに有効であり、食事満足度を向上させる効果も示された。
9. 炎症性腸疾患患者を対象としたセルフマネジメント介入の研究動向	単	2014年8月30日	第19回日本難病看護学会学術集会（於広島国際大学呉キャンパス）	炎症性腸疾患患者のセルフマネジメントに焦点を当てた介入研究の研究動向、介入効果や今後の課題について明らかにすることを目的として、32件の英語文献を分析した。結果、ここ10数年で本テーマに関する研究が増加していた。疾患に関する知識の習得や向上はいずれの介入でも効果がみられたが、知識の習得が患者のQOLや身体・心理的健康状態の改善には繋がっておらず、患者教育のあり方を見直す必要性が示唆された。
10. 「悪化した病状を抱えて生存する時期」における卵巣がん患者の配偶者の体験—遺族の語りからの分析—	共	2014年11月1日	第38回日本死の臨床研究会年次大会（於別府国際コンベンションセンタービーコンプラザ）	卵巣がん患者が「悪化した病状を抱えて生存する時期」における配偶者の体験を明らかにすることを目的に、配偶者（遺族）3名に半構造化面接を行い、得られたデータを質的に分析した。結果、配偶者は、「少しでも長く妻に生きていてほしい」という願いを軸に、「妻の死を意識する自分と向き合う」ことをしながら、「改めて夫婦であることを見つめる」ことを繰り返し、変化していく妻の病状に対応して「生活を再編する」体験をしていた。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：松井利江、福田陽子、布谷麻耶
11. 卵巣がん患者の配偶者が語る体験プロセスから見出されたもの	共	2013年11月1日	第37回日本死の臨床研究会年次大会（於くびきメッセ）	卵巣がん患者の療養過程における配偶者の心理プロセスを明らかにすることを目的に、配偶者（遺族）3名に半構造化面接を行い、得られたデータを質的に分析した。結果、化学療法の効果が得られなくなった時期に夫は妻の病状の変化を感じ取り、化学療法に代わる新たな治療法を模索していた。また、病状の悪化する妻を支えることに専念するため、夫または子供が仕事を辞めていた。さらに、夫は身内や親しい医療関係者に相談して問題解決に取り組んでいた。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：松井利江、福田陽子、布谷麻耶
12. クロウン病患者の食事満足度に関連する要因の分析	単	2012年8月1日	第17回日本難病看護学会学術集会（於セッション杉並）	クロウン病患者の食事満足度に関連する要因を属性要因、疾患要因、治療要因、及び行動要因から明らかにすることを目的に、寛解期にあつて自宅で生活する成人クロウン病患者115名を対象に質問紙調査を実施した。回答のあつた37名のデータを分析した結果、クロウン病活動度が低いほど、また主観的重症度が低いほど食事の量的満足度が高く、同居家族があり、栄養剤からの摂取カロリーが少ないほど、また試し体験行動の頻度が多いほど食事の質的満足度が高いことが明らかになった。さらに、1日の食事回数が多いほど食事の量的、質的満足度が高かった。
13. 周術期患者に対する寝衣交換の技	共	2011年8月1日	第37回日本看護研究学	成人看護学外科系実習において、術後疼痛があり輸

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
術の教育効果		日	会学術集会(於パシフィ コ横浜)	液中の患者に対する寝衣交換の技術向上を図るため に、実習初日に学内演習を実施するとともに、学生 による自己評価及び教員等による他者評価を導入し 、その効果を学生の自己評価の結果から検討した。 学修達成度が「非常に・大体当てはまる」と自己評 価した割合が75%以上の項目は、学内演習では9項目 、術後患者に初めて寝衣交換を実施した際には0項目 、実習終了時では19項目となり、この教育方法の有 効性が示唆された。 本人担当部分：計画立案、データ収集、分析までを 担当。 共同発表者：熊澤友紀、深田順子、吹田（布谷）麻 耶、鎌倉やよい
14. 地域高齢者におけるセルフ・メイ ドによる口腔ケアプログラムの開 発	共	2011年12月1 日	第31回日本看護科学学 会学術集会(於高知文化 プラザかるぼーと)	高齢者がセルフ・メイドできる機能的口腔ケアプ ログラム案を開発し、その効果を検証することを目的 とした。高齢者21名を無作為に介入群9名と対照群12 名に分け、介入前、1ヵ月後、2ヵ月後で嚥下機能、 発話機能、呼吸機能を測定し比較した。その結果、 介入群において呼吸機能の一つである最大吸気保持 時間が1ヵ月後、2ヵ月後で有意に延長する効果が示 された。 本人担当部分：データ収集を担当。 共同発表者：深田順子、鎌倉やよい、熊澤友紀、百 瀬由美子、布谷麻耶、藤野あゆみ、横矢ゆかり、米 田雅彦
15. 地域高齢者における器質的口腔ケ アプログラムの効果	共	2010年9月1 日	第16回日本摂食・嚥下 リハビリテーション学 会学術大会(於新潟コ ンベンションセンター)	高齢者の誤嚥性肺炎予防を目指す器質的口腔ケア プログラム案を開発し、その効果を検証することを目 的とした。高齢者20名を対象にプログラムを適用し 、その効果を介入前、1ヵ月後、2ヵ月後で磨き残し の程度、唾液量、唾液中に含まれる細菌量、および 口臭を測定し比較した。結果、プログラムの実施前 後で1日の歯磨き回数が有意に増加し、磨き残しの合 計得点が有意に低下した。唾液量、唾液中に含まれ る細菌量、および口臭には実施前後で有意な変化は 認められなかった。 本人担当部分：データ収集を担当。 共同発表者：鎌倉やよい、深田順子、熊澤友紀、百 瀬由美子、吹田（布谷）麻耶、横矢ゆかり、米田雅 彦
16. 地域高齢者におけるセルフ・メイ ドの機能的口腔ケアプログラムの 効果	共	2010年9月1 日	第16回日本摂食・嚥下 リハビリテーション学 会学術大会(於新潟コ ンベンションセンター)	高齢者がセルフ・メイドできる機能的口腔ケアプ ログラム案を開発し、その効果を検証することを目的 とした。高齢者21名を無作為に介入群9名と対照群12 名に分け、介入前、1ヵ月後、2ヵ月後で嚥下機能、 発話機能、呼吸機能を測定し比較した。その結果、 介入群において呼吸機能の一つである最大吸気保持 時間が1ヵ月後、2ヵ月後で有意に延長する効果が示 された。 本人担当部分：データ収集を担当。 共同発表者：深田順子、鎌倉やよい、熊澤友紀、百 瀬由美子、吹田（布谷）麻耶、横矢ゆかり、米田雅 彦
17. クロウン病患者の食事満足度 に関連する要因の分析	共	2010年12月1 日	第30回日本看護科学学 会学術集会(於札幌コ ンベンションセンター)	クロウン病患者の食事満足度に関連する要因を属性 要因、疾患要因、治療要因、及び行動要因から明ら かにすることを目的に、寛解期にあつて自宅で生活 する成人クロウン病患者98名を対象に質問紙調査を 実施した。回答のあつた22名のデータを分析した結 果、クロウン病活動度が低いほど、また主観的重症 度が低いほど食事の量的満足度が高いことが明らか になった。さらに、試し体験行動の頻度が多いほど 食事の量的、質的満足度が高かった。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共同発表者：吹田（布谷）麻耶、鎌倉やよい、深田 順子、熊澤友紀
18. 地域高齢者における保健行動に 関連した自己制御尺度の妥当性と 信頼性の検討	共	2010年12月1 日	第30回日本看護科学学 会学術集会(於札幌コ ンベンションセンター)	地域高齢者の保健行動に対する自己制御力をアセス メントする尺度の妥当性と信頼性を検討するために 、高齢者20名を対象に口腔ケアプログラムを1ヵ月間 実施し、実施前後に自己制御尺度を用いて調査を行 った。結果、口腔ケアに関してセルフチェックがで きる高齢者は、自己制御尺度の合計得点が高いこと から、自己制御尺度は自己制御の強度を示すうえで 、10%の有意水準内での妥当性が示唆された。また 、コンプライアンス、定期検診以外の保健行動につ いては再テスト法による信頼性が確認された。 本人担当部分：データ収集を担当。 共同発表者：深田順子、鎌倉やよい、百瀬由美子、 吹田（布谷）麻耶、熊澤友紀、横矢ゆかり、坂上貴 之
19. 看護学実習における周術期患者へ のフィジカルアセスメント技術教	共	2010年12月1 日	第30回日本看護科学学 会学術集会(於札幌コ ンベンションセンター)	成人看護学実習において周術期患者に対するフィジ カル・アセスメント能力が向上することを目的に、

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
育の効果			ペンションセンター)	学生自身による評価と教員または病棟スタッフによる他者評価のフィードバックを行い、その教育効果を検討した。3年次生80名を対象とした結果、実習前、中、後で自己評価、他者評価ともに達成度の高い項目が8項目から9項目、最終的に24項目となり、この教育方法はフィジカル・アセスメント能力を向上させる可能性が示唆された。 本人担当部分：計画立案、データ収集、分析までを担当。 共同発表者：熊澤友紀、深田順子、吹田（布谷）麻耶、鎌倉やよい
20. PRECEDE-PROCEEDモデルを用いた地域高齢者における口腔保健尺度の開発	共	2009年9月1日	第14回日本老年看護学会学術集会（於札幌コンベンションセンター）	高齢者が自律的に取り組むことができる口腔ケアプログラムの開発を目指し、その第一段階として高齢者自身が行っている口腔保健行動の現状を質的に明らかにするために行ったフォーカス・グループ・インタビューの結果から7要因41項目からなる口腔保健行動尺度を開発し、高齢者及び40歳以上の同居家族の計1883名に質問紙調査を行った。回収された951名のデータを分析した結果、最終的に6要因25項目の尺度となった。 本人担当部分：データ収集を担当。 共同発表者：深田順子、百瀬由美子、鎌倉やよい、吹田（布谷）麻耶、森本紗磨美、藤野あゆみ、横矢ゆかり、坂上貴之
21. クロウン病者がウェブ闘病記を書くことの意味	単	2009年8月1日	第14回日本難病看護学会学術集会（於前橋テラサ）	クロウン病者にとってウェブ闘病記を書くことの意味を探索することを目的に、162件のサイトを対象に、開設者の属性、開設動向及び付加機能の利用状況、開設動機、形式と記述内容の4点について分析した。結果、開設者は30歳代の男性が多く、開設動機は「社会貢献」と同病者との「コミュニティの形成」が多かった。内容は、日々の自分の体調を書いたものが7割であった。以上より、ウェブ闘病記は病者にとって「健康状態のモニタリングツール」と「同病者との交流の場」として意味づけられていた。
22. 地域高齢者の口腔保健行動－PRECEDE-PROCEEDモデルを用いた類型化－	共	2009年8月	第35回日本看護研究学会学術集会（於パシフィコ横浜）	高齢者が主体的・自律的に取り組むことができる口腔ケアプログラムの開発を目指し、その第一段階として高齢者自身が行っている口腔保健行動の現状を質的に明らかにすることを目的にシニアクラブに所属する高齢者を対象にフォーカス・グループ・インタビューを行った。得られたデータをPRECEDEモデルを基に分類と抽象化を行い、介入の視点を検討した。 本人担当部分：計画立案、データ収集、分析、結果のまとめまでを担当。 共同発表者：吹田（布谷）麻耶、百瀬由美子、深田順子、森本紗磨美、横矢ゆかり、藤野あゆみ、鎌倉やよい
23. クロウン病者の食事を通じた他者との関わりの体験	共	2007年7月	第12回日本難病看護学会学術集会（於青森県立保健大学）	クロウン病者の食事を通じた他者との関わりの体験を明らかにすることを目的にGrounded Theory Approachを用いて、成人クロウン病者17名に半構造化面接を行い、データを分析した。結果、病者の食事を通じた他者との関わりの体験は、病者が発病後、他者との食事の場で身近な者と美味しさを分かち合えない、食事を共にする相手に気を遣われるなどの心的負担感を感じながらも、試行錯誤しながら自分なりの対処法を見出し、確立していくプロセスが明らかになった。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共同発表者：吹田（布谷）麻耶、鈴木純恵
24. クロウン病者の看護研究の動向	共	2007年7月	第12回日本難病看護学会学術集会（於青森県立保健大学）	クロウン病者への看護の概況を明らかにすることを目的に、1983－2005年に発表されたクロウン病者の看護に関する原著論文77件を対象に、研究方法と内容について分析した。結果、入院中の1事例を対象とし、行った看護を振り返るかたちでの事例研究が大半であった。今後、事例研究を積み重ねるとともに、病者に共通した生活体験を知る視点、入院中だけでなく退院後の生活を含めた看護、ケアの有効性を科学的に検証する研究などの必要性が示唆された。 本人担当部分：データの分析を担当。 共同発表者：荒木しのぶ、吹田（布谷）麻耶、鈴木純恵
25. 在宅栄養法の普及に関する看護師の意識調査	共	2003年2月	第25回在宅経腸栄養研究会第17回在宅静脈栄養研究会合同集会（於パシフィコ横浜）	在宅栄養法に関する臨床の看護師の意識を明らかにするために、無作為抽出した関西地区の18施設に勤務する看護師579名を対象に質問紙調査を実施した。その結果、前回のA大学病院に勤務する看護師に行った調査結果と同様、栄養管理チームの認知度が低く、チーム医療が浸透していないこと、在宅栄養法において看護師が患者へのケアとして現状でできることと認識している役割との間にギャップがあることが

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
26. わが国の在宅栄養法の普及に関する要因について	共	2001年12月	第12回日本在宅医療研究会学術集会（於大阪大学コンベンションセンター）	明らかになった。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共同発表者：吹田（布谷）麻耶、高木洋治 本邦において、欧米諸国に比べ在宅栄養法の普及が進んでいない要因が医療者、特に看護師に存在しているか否かを明らかにする目的で、A大学病院に勤務する看護師469名に質問紙調査を実施した。結果、要因として、栄養管理チームの認知度が低く、チーム医療が浸透していないこと、在宅栄養法において看護師がケアとして現状でできることと認識している役割との間にギャップがあり、患者・家族に十分なケアが提供されず、彼らが在宅療養を受け入れることを困難にしている恐れがあること、の2点が考えられた。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共同発表者：吹田（布谷）麻耶、福田祥子、高木洋治
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 第34回日本看護科学学会学術集会シンポジウムⅠ実践の課題を研究へー看護ケアプログラムの開発	共	2014年11月	第34回日本看護科学学会学術集会（於名古屋国際会議場）	看護ケアプログラムの開発についてのシンポジウムにおいて、これまでに行ったクローン病患者への食事の自己記録を活用した食事支援プログラムの開発とその効果の検証結果について紹介するとともに、看護ケアプログラムを開発するにあたって、患者の行動変容を促し、それを持続させるための仕組みをどのように組み込むかについて参加者と共に討論を行った。 本人担当部分：シンポジストを担当
6. 研究費の取得状況				
1. 炎症性腸疾患患者へのe-ポートフォリオを用いたセルフケア支援プログラムの開発	共	2015年4月～2018年3月予定	学術研究助成基金助成金（挑戦的萌芽研究）	分担者
2. 炎症性腸疾患患者の治療法に関する意思決定支援モデルの構築	単	2015年4月～2018年3月予定	学術研究助成基金助成金（若手研究（B））	代表者
3. 壮年期の進行期婦人科がん患者の配偶者が体験する支援ニーズに基づくケアモデルの構築	共	2013年4月～2016年3月	学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））	分担者
4. 寛解と再発を繰り返す婦人科がん患者の家族の心理的プロセス—遺族への面接調査の分析から—	共	2012年～2014年	天理医療大学学内研究助成	分担者
5. クロウン病患者への行動分析的アプローチに基づく食事指導プログラムの開発と検証	単	2011年4月～2014年3月	学術研究助成基金助成金（若手研究（B））	代表者
6. クロウン病患者への食事栄養指導プログラムの開発と有効性の検証	単	2009年4月～2011年3月	学術研究助成基金助成金（研究活動スタート支援）	代表者
7. 医療・教育現場で真に役立つ自己制御尺度の開発と応用	共	2008年4月～2011年3月	学術研究助成基金助成金（基盤研究（B））	分担者
8. クロウン病者の食生活体験のプロセスに関する研究	単	2007年	公益信託山路ふみ子専門看護教育研究助成基金	代表者

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2016年4月～現在	兵庫県看護協会 兵庫県ナースセンター再就業支援研修 講師